

「話すこと・聞くこと」にかかわる言語活動の工夫

すべての教育活動に「話すこと・聞くこと」にかかわる言語活動がある。音声言語活動は教育活動の随所に顕在的に現れて、その成立に寄与している。学校の教育活動は教育課程（カリキュラム）という枠に収められているわけであるが、

教育課程全体における
「話すこと・聞くこと」



上越教育大学教授

有沢俊太郎

対応のポイント

- ① 「話すこと・聞くこと」にかかわる言語活動は教育課程の内外でいつでも、どこでも行われているので、日常生活に紛れやすい。教育的な効果を得るためには、教育課程の構造を意識して、取り扱う言語活動を精選することが大切である。
- ② 教育課程は、国語科を中心に各教科、教科周辺、学校周辺、地域社会（家庭）に同心円状に広がっている。各領域に「ふさわしい」言語活動を重点的に取りあげることが大切である。
- ③ 一般的に音声学的な学習は国語科で、会話を楽しむことは総合的な学習の時間で行うのがふさわしい。国語科では「音声の働きや仕組みに関する事項」（中学校一学年）が重視されており、その面の指導も落とさないことが大切である。
- ④ 「話すこと・聞くこと」の指導は時間的な流れのなかにある。〈説明〉でも、状況を変えて繰り返ししたり、「書くこと・読むこと」との連携を図って指導や評価の工夫をすることが大切である。

どこで行われる教育活動であれ、「話すこと・聞くこと」と無縁ではありえない。「話すこと・聞くこと」は教科を横断し、領域にわたって展開している。

最近では、教育活動が1校の教育課程の外にまではみ出している場合もある。このような場合でも、普段は言葉を交わさない学校外の他者の参入を得て、「話すこと・聞くこと」はいつそう活性化される。なぜなら、そこに家庭や地域社会に生きる人々の実感が持ち込まれるからである。

英国に「教育課程を貫く言語」(Language Across the Curriculum)という言い方があるが、「言語」を「話すこと・聞くこと」に置き換え、「……を貫く」に「……の周縁の」(Around)と「……から(生活が)染み出る」(Through)を加えて、教育課程という枠組みを弾力的にとらえてみる。すると、その広がりや奥行きの部分に、「話すこと・聞くこと」にかかわる良質の言語活動が位置づけられることになる。

以下では、上越市の小学校で実施された「桑取谷・与論島児童の写真撮影によ

る交流」を取りあげる。この交流は遠く離れた地域の、それぞれ二校の小学校が協同で取り組んだ数々の教育活動から成っている。それらは、地域・家庭の実生活に根ざした学校内外の教育課程に表現されている(資料提供は桑取小学校長・上野有紀氏による)。

「雪と珊瑚礁」 交流の概要

交流活動は、最終的には写真展に集約された。地元紙はその様子を次のように報じた。

「上越市立桑取、谷浜両小と鹿児島県与論島の児童が撮った写真の展覧会が二十五日、上越市民プラザ一階のギャラリィで始まった。『雪と珊瑚礁』と題した展覧会は、写真家の佐藤秀明さんと田州生さんが『写真を通じて雪国と南国の子どもとの交流』を願って企画したもの。百点以上が展示されている」(『上越タイムス』二〇〇八年三月二八日付け)。

写真展「雪と珊瑚礁」までの活動は、次のとおりである。

「二月二日」学習会(谷浜小学校)が佐藤さんをゲストティーチャーとして行われた。学習内容は撮影方法の説明を聞いて、試し撮りをするものであった(二月五日まで作品をためる)

「二月」現像と引き伸ばし(一人二枚)、
出品作品選び(佐藤さん)

「三月一日」写真学習会(学級での学習、タイトルつけなど)

「三月一日」台紙貼り

「三月二日」会場準備

「三月二日～三日」写真展(三一日午後から撤去、後片づけ)

どの段階にも、「話すこと・聞くこと」がさまざまな言語活動のかたちで展開する可能性がある。二月上旬以降、佐藤さんが出品作品を一人につき二枚ずつ選んだということであるが、子どもは自分の撮ったその作品がなぜ選ばれたのか、その理由(根拠)を何度も尋ねるであろう。この〈問答〉(言語活動・以下へ)で表す)は、自分で苦労して撮ったものであるだけに切実なものがある。

また、現像・引き伸ばし・台紙貼りにも、専門家としての佐藤さんへの〈問い〉

が不可欠であったろう。それは、写真に関する一連の知識や技能を系統的に学ぶことであり、教育課程全体のなかのこのコースは「フォトプログラム」と名づけられている。

一月二三日の学習会…〈説明を聞く〉という基本的活動

この日、桑取小学校の子どもたちは桑取川下流の谷浜小学校を訪れ、谷浜小学校の子どもと一緒に佐藤さんからインスタントカメラの使い方について説明を聞いた。その後、谷浜小学校と学校周辺で実際に試し撮りを行った。カリキュラム論的には、同じ桑取谷地域ではあるが、「桑取小学校周縁に位置づけられた」フィールドが活動の場になったということになる。

インスタントカメラの使い方方は簡単なので、子どもたちも気楽に聞いていたのであろう。あるいは説明の要点を聞き流してしまおうということもあったかもしれない。その結果、いざフィールドに出て撮影するという段になると、フィルター

から目を離れたまま被写体をねらうという子どもが多数出た。子どもたちは最近のデジタルカメラの操作法を熟知していたのである。

デジタルカメラは、目と腕を連動させて被写体をファインダーに写すが、インスタントカメラは、目とファインダーを一体にして被写体に迫る。カメラアングル(角度)や中心点の押さえ(距離)は子どもの眼そのものと連動する。全体での説明時のこのような注意は、試し撮りという実際の場面で、もう一度、一人ひとりの子どもたちのカメラの使い方の実態(基本的操作の巧拙)に即して、必要に応じて取り立てられ、繰り返しねばならなかったのである。

「相手の必要性に応じて実地に要点を繰り返し返すこと」とは、〈説明をする・説明を聞く〉という言語活動の充実にきわめて重要な意味を持っている。繰り返し回数、教育的に限られた時間の枠内であれば、おのずと限りがある。

しかし、子どもたちはプロのカメラマンから実地の説明を再び(三度)聞くという経験のなかから、デジタルからイン

スタントカメラの操作法を型として整えていったのである。それが習熟という域に達したということでもある。

三月一〇日の写真学習会…教科等における〈紹介〉〈感想の発表・交流〉の学習(各学級)

桑取小学校の子どもたちは、「桑取らしいもの・自分にとって大切なもの」を撮影した。具体的には「家の周りの景色」「家で使っている道具」「家で飼っているペット」「家族の人たち」である。そのなかに、「大きな木の根元で雪を割って生えている小さな若木」の写真がある。この写真には、「木の子どもたち」(五年男子)というタイトル(キャプション)がついている。

国語科において、この作品の〈紹介〉〈感想の発表・交流〉学習を試みるとすれば、次のような言語活動が考えられる。

- 〈ショー・アンド・テル〉の構成…ものや人を紹介するには、「相手をなかに引き込む、誘う」という工夫がなければならぬ。この観点から、紹介の

構成をどのようにするか。

- 〈シヨール・アンド・テル〉の方法…写真を提示しながら紹介をする。視線・目配り（対対象、対他）。タイトル「木の子どもたち」の説明をどこに入れるか、等々。

以上、国語科では発音・発声（アクセント、イントネーション、音量、スピードなど）にも気をつける。

- 〈感想の発表・交流〉…感想・批評を出し合い交流する。与論町立茶花小学校五年生男子の作品に、「大す木」とタイトルをついた【ひとかかえの太木】を写した作品がある。太い幹の肌はいかにも南国であり、怪物の皮膚のようにも見える。このような作品と比較すれば、雪を割って生きる北国の若木の健気さがひとときわくローズアップされるであろう。

また、小学校新学習指導要領の理科に、「科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりするなどの学習活動が充実するように配慮すること」というくだりがある。これまで、「大きな木」とか「若木」と言っていたものを、

理科的な学名を調べて、それを〈紹介〉や〈説明〉のなかに織り込むことができれば、それは理科学習にも結びついた言語活動をしていることになる。

三月二五日～三一日の写真展…会場における〈会話〉

この交換写真展の目的（趣旨）は、「自分の住んでいる地域のすばらしさや相手の地域のよさを知らうとする」ことである。この目的を追求する過程において、「……言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われるようにすること」（小・中学校新学習指導要領「総合的な学習の時間」）が重視されている。

展覧会会場という教室を飛び出した場面でも、自分たちの感想を他者のそれと突き合わせて分析・整理し、あらたに価値づけることが大切である。そのために、来観者の感想はきわめて有効な資料となるろう。

- 全く環境が異なる地域の対比が、実におもしろかった。雪景色や雪国の生活

と、鮮やかな色彩の与論島の写真を見て、「こんなにもちがうものか」と思った。子どもにしか撮れない写真が何枚もあった。

- 自分が住んでいる地域とともに、子どもたちは自分の周りの人や友だち、家族も大切に思っていることが伝わってきた。

このような来観者の感想を資料に、子どもたちは会場で即興的な〈会話〉を楽しむことができる。それまでの努力が私たちになったという成就感に支えられながら、家族・近所の人々、あるいはまったく知らない人と交わす〈会話〉は、つくりものではない本物の状況から生まれたものだけに、思いがけない発見がある。このような発見は容易に忘れない。それは、子どもたちに新学期の学習に取り組む強い意欲を与えるであろう。